

さんむのふるさと散歩

NO.14

荻生徂徠と覚眼法印

荻生徂徠（一六六六～一七二八）は江戸時代中期の儒学者で柳沢吉保・徳川吉宗に重用された学者です。

ちなみに、赤穂浪士四十七士の切腹の決定にも関与しています。

徂徠が14才の時、延宝7（一六七九）年、父方庵が徳川綱吉に処分され、江戸追放となり、徂徠の母の故郷、本納村（現茂原市）に移り住みます。辛い流浪生活の始まりです。

天和3（一六八三）年、徂徠18歳の時に下横地村（現山武市）の名主小河弥右衛門の招きにより横地村に移り住みます。そこで、横地村円頓寺住職覚眼を知ることとなります。徂徠は覚眼から学問上の指導、経済的な援助を受けたと考えられます。

横地村では、2年ほど生活したのち、上総各地を転々としています。

元禄3（一六九〇）年、徂徠35才の時許されて江戸に帰ります。約20年間の流浪の生活を終えることとなりました。移住した年の秋には祖母が死去し、覚眼によって「麗心院」の諡号（死後にお

くる名）を受け、円頓寺に埋葬されましたが、現在墓は確認できません。

横地村に滞在した2年間は徂徠にとつては充実した日々だったと思われま

す。後に徂徠が覚眼に依頼され、儒学者であるにもかかわらず「勝覚寺縁起」を起草していることでも分かります。「縁起」の巻末には流浪の父方庵が覚眼法印の世話を受けたことや、法印の伝承により、この「縁起」が起草されたことが記されています。

現在、覚眼法印の墓は勝覚寺にあり、山武市の指定文化財になっています。

※円頓寺は現在廃寺で現況は荒地となっています。

※「勝覚寺縁起」(写)は山武市和田 佐瀬家蔵



覚眼法印の墓（松ヶ谷勝覚寺）



円頓寺跡（下横地地区）